
Mr. Marry Christmas

霜原 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M r . M a r r y C h r i s t m a s

【Nコード】

N 7 9 4 0 Z

【作者名】

霜原 葵

【あらすじ】

親元を離れて暮らす男は、クリスマスの日を、しばらくの間ひとりで迎えていた。そして、今年も……

一人身のクリスマスというのに慣れてきた。
果たして、今年で何度目だろうかと考え起こしてみるも、まったく見当が付きそうもない。

仕方ない。今年も一人で迎えるか。

一年のうちで、いくつかある特別な日を。

無感情な目覚まし時計の歌声で目が覚めた。

気分的にはさほどよろしくはないが、日々の生活リズムを崩すつもりなど毛頭はない。

掛け布団をどけて、冬の朝の冷たい空気が、^{ほて}熱った俺の体温を静かに奪っていく。

薄暗い部屋の中をゆっくりと移動して、静かに扉を開く。

リビングは大きな冷凍庫だった。

昨日以上の冷え込みだ。これは堪える。

たしか、コーンスープは切らしていたはずだった。仕方ない。今日はホットコーヒーでも頂くか。

今日は少し変わったものが食べたい。そういえば、昨夜のペペロンチーノが残っていたはずだ。もったいないから食べてしまおう。レンジに入れている間に、布団でもたたんでしまおうか。しなければならぬことがたくさんありすぎて、もうすでに疲れてしまいうさだだが仕方が無い。

さてと、もうそろそろだろう。

『最初のニュースです。本日未明、福島県 市××町の住宅で、

この家に住む角野昌義さん一家が惨殺されているのが発見されました。警察の調べによりますと、角野さん一家は全身に渡って鋭利な刃物で刺したような傷があり、出血多量で死亡したものと見ており、家の中には荒らされた形跡が無いことから、怨恨が原因と見て捜査を行っており……』

……朝から嫌なニュースだ。

この事件の犯人は、よくもまあ一家全員を殺害したものだ。何の恨みを持っていたのかは分からぬが、話し合いで解決することはできなかったのだろうか。

ましてや、この聖なる日に、血を流さなくてもいいだろうに。

……くそう。せっかくの朝食がおいしく感じられなくなってしまった。ふう。仕方ない。これくらいにして、少し出かけるとしよう。風が冷たそうだな。しっかりと防寒対策をしていこう。

……おや、ひげが伸びてきているな。忘れないうちに剃っておくとしよう。

ふう、寒い。

我が家から一歩外に出ただけでこの有様か。これは選択肢を間違えてしまったかな。

ひとまず、出てしまったからには行けるところまで行こう。

まず、街のほうにでも行ってみようかな。

これはこれは。あたり一面、クリスマス一色に染まっているものだ。

それもそうか。今宵はクリスマスイブ。こうなるのも無理は無い。いや、それに気がつかなかった俺が遅れているんだな。

このごろ、“今”その瞬間だけを見て生活しているのが続いているから、日付を忘れていたのかもしれない。

いや、朝はしっかりと分かっていたはずだ。何故だ。

……。ひとまず、どこか休める場所でも探そう。

腕時計を見ると、午前十一時を僅かに過ぎた頃。普段なら子供を連れた母親たちが集う街の小さな公園も、大寒波到来のためか、今日はさびしく見える。空いているベンチに腰を下ろすと、身に着けている衣服越しに寒さが伝わってきて、思わず身体を震わせる。

それにしても、さみしいものだ。人の声が聞こえるだけで、暖かさを分けてもらえるというのに、今日に限っては、風が俺に寒さを無理やり押し付けてくる。

ここにあるのは、塗装の剥げかけた動物型の遊具に、枯れた木立、寂しそうに風に揺られるブランコに、今、俺が座っている青が少しはげたベンチだけ。彼らがもし感情を持っていたのなら、きっと「寒いから何か掛けてくれ」とでも言うかもしれない。

……すまないな。今の俺には余りの防寒着を持ち合わせていないんだ。

だから、せめてもの思いで寄り添うことしかできないんだよ。

……ああ、俺、なにやっているんだろう。

先ほどの街の賑わいから置いていかれてしまったようなこの公園で、一人こうして時間を無駄に浪費して。

このままここにいたら、俺までも置いていかれてしまう。

申し訳ないが、ここらで失敬させてもらう。風なんか引くんじゃないぞ。

公園から立ち去るとき、後ろから「そっちこそ」と声が聞こえたような気がした。

どのくらい歩いてきたのだろう。

あたりを見渡せば、田んぼが広がり、少し離れたところにぎやかな街が見える。

結構な距離を歩いてきたんだな。俺もまだまだいけるということか。

頭の上では、侘しく黒の使いが孤独を嘆いて鳴き、ただならぬ哀愁を漂わせている。

ふと、視線を遠くに移せば、遠くの山々には白粉が施してあつて、冬、到来とばかりの姿を晒している。昨日はあんなものしていかなかったから、昨晚だけで今のようになったのだな。これは今晚も降りそうだ……。

……おや、うわさをすれば、もう降り出して来たか。

空を仰ぐと、先ほどまでの晴天が嘘のように一面灰色に染まり、そこからひらりと雪虫たちが降り注ぐ。まったく、気まぐれな天気だ。

それにしても、傘を置いてきてしまったから、このままここに居座るのはまずい。ひどくならないうちに、街のほうへ戻るとするか。

街へ戻る頃には、あたりはすでに暗くなってしまった。

まぶしいばかりに明かりが灯され、それに応ずるように流れる一昔流行ったクリスマスソング。

夕食のために入った喫茶店から見るこの街は、なんだか生きていくようにも見える。

俺は、この街の一部として生きているんだという考えが頭をよぎるが、即座に捨て去った。

それは当たり前すぎて、今まで知らずの内に知っていた周知の事実。考えるだけ無駄なことだ。

さて、食べてしまおうかと思って手に取ったオープンサンドウィッチは、すでに冷たくなってしまっていた。

店を後にすると、特に行き場の無い俺は町を彷徨うことにした。今は街一番の通りを駅方面に向かってはいるが、格別駅に用は無い。

それにしても、この路には若い恋人たちが数多くいるものだ。こ

れまでに、もう十指では数え切れないほどのカップルとであつた。これも、きつと今日が特別な日だからだろう。

特別羨ましいとは思わないが、街に出てくると、やはり自分が一人だということに気づかされる。

そうして早くなる歩調。傍から見れば、カップルたちに嫉妬するかわいそうな男と見えてしまつかもしれないな。これは傑作だ。両親が知ったらどうなることだろう。

……いや、知らないほうが良いな。後々苦勞することになるだろうからな。

歩いていると、ほろりと雪が降り始める。

先ほどまでやんでいたのに、また来てしまったか。ほんとうに気まぐれな天気だ。嫌われ者め。

道路をあわてて走っていく車は、見ていると少し可笑しく見えた。……。おや、この曲は。

クリスマスソングではあるだろうが、少し場違いにしか思えない。……というより、聖夜の雰囲気、冷酷な一撃の下に破壊してしまっている。

まったく。選曲ミスも甚だしい。

ふと、顔を上げると、見事にライトアップされた大きなクリスマスツリーが俺を出迎えた。

……ふっ。

見上げれば、最上部に輝くばかりの星が鎮座していた。

なんだって、今日は。

自分でも頬がほころんだのを感じながら、囁くような小さな声が、俺の口を突いて出た。

「Good evening, Mr. Marry Christmas」

（後書き）

つたない作品ですが、ご一読いただきありがとうございます。

追記としてですが、当作品は、一定期間のち『短編集』に追加いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7940z/>

Mr. Marry Christmas

2011年12月25日15時50分発行